

(☆：チームリーダー ○：発表者)

**1. 福井赤十字病院【地域みんなで支え隊】****入院早期の介護支援連携カンファレンス開催を増やす～高齢者の患者家族が住みなれた地域に安心して退院できる仕組みを作る～**☆西向 秀代(看護師)  
○奈須田 瞳(社会福祉士)

当院の全入院患者のうち60.6%が、高齢者世帯、家族の就労による介護力不足など退院困難な要因を有している。退院後も継続的な医療やケア、介護サービスを必要とする高齢者は増加傾向で、退院支援のニーズは高い。そこで入院早期から院内外の多職種と情報を共有し、患者家族の意向を踏まえた退院支援計画を検討するために、入院早期の退院支援システムの強化が必要と考え、初回介護支援連携指導カンファレンス開催の実績向上のため、改善活動に取り組んだ。開催率が最も高い病棟の実績が約23%であったため、目標を23%とした。開催率向上の対策として、病棟看護師の負担軽減、算定漏れ防止、地域の介護支援専門員にシステムを浸透させるよう情報提供を行った。結果、実施率は24.2%でQC前より13.9%増加し、目標達成となった。全病棟の算定件数は、411件、算定額1,644,000円と約2倍に増加した。また、管理を定着させることで、次年度の開催率は22.4%になった。今回の取り組みで良かった点は、地域の医療と介護ニーズに着目し、院内での活動から、地域へ拡大できた点にある。この活動により、退院支援を必要とする高齢患者と家族に対して、入院早期より介護支援専門員と協働でかかわりを持つことが可能となり、安心して在宅復帰するための支援が提供できる体制となった。

**3. 岐阜赤十字病院【チームJ】****患者のドレーンへの苦痛を軽減する**☆平山 若奈(看護師)  
○森 あかね(看護師)、川島 紗和子(看護師)、  
河野 佑奈(看護師)、狭間 早織(看護師)、福永 祥子(看護師)

当病棟に入院する手術患者のうち、H29年4月～H30年3月の間でドレーンが挿入された患者は61%であり、そのうちJ-VACドレーンが挿入された患者は81%であった。入院患者の約半数にJ-VACドレーンが留置される現状がある。患者からJ-VACドレーンに対する不安や苦痛の言葉が多く聴取されたことから、改善活動としてJ-VACドレーンが1本のみ留置されている患者を対象に苦痛を軽減する取り組みを行った。現状調査から、点数の高かった「邪魔」「重い」「刺入部の痛み」「他ルート類に絡まる」「寝返りが打てない」の5項目に焦点を当てて取り組みを行った。目標を「患者が抱える不安や苦痛の項目の平均値が1.0点以下になる」とし、特性要因図をそれぞれの項目で作成し問題の共通点を模索した。共通した問題点を「重要性」「実現性」「継続性」の3点から評価し、対策案を立案した。対策として、J-VACドレーンをポシェットに入れて肩から斜めがけにし、腹帯の中に入れて固定の強化と安定化を図った。対策実施後、アンケート調査で、全ての項目の平均値が1.0点以下となり目標達成となった。波及効果としてスタッフの意識の変化も見られた。今後の課題として、J-VACドレーンが複数留置された場合の対策や、今回の取り組みの歯止めと定着化を行っていく必要がある。

**2. 諏訪赤十字病院【3Dケアサポートチーム】****3Dケアサポートチーム(せん妄対策チーム)は、なぜ結果を出せたのか。～転倒転落率・看護スタッフの負担度・転倒高リスク睡眠薬の使用数の変化～**☆丸山 史(医師)  
○丸山 史(医師)

【目的】入院患者の高齢化に伴い、せん妄発症が問題となっている。せん妄患者は転倒転落率の増加と関連しており、医療スタッフ・特に看護師の心理的負担度とも関連している。このため、せん妄に対する組織的介入を行うため、多職種チームを設立した。

【方法】せん妄対策に最も有効といわれているのは、スタッフ教育である。On the job training：毎週月曜日に病院内すべての部署のラウンドを行い、顔の見える関係作り・いつでも相談できる関係作りを意識し、今、ここで生じている問題点について現場スタッフと話し合いを行った。Off the job training：各部署毎に、せん妄や睡眠障害に関する勉強会を行った。各部署にリンクナースを配置し、各部署の自律性を高めつつ双方向性の関係を意識した。

【結果】転倒転落率は、2.76+/-0.61から2.19+/-0.63(日本病学会 平均2.73)まで減少した。看護負担度は3.57+/-0.73から2.02+/-0.95まで低下。転倒と関連性の高い睡眠薬A処方数1ヶ月1216錠(当院入院患者に払い出された総実数)から383錠まで減少、睡眠薬B866錠より293錠まで減少した。

【今後の展開】今年度から、緩和、認知症、精神科リエゾンの3チーム活動が本格化する。3チームの合同ラウンドも行ない、情報共有や協働し患者のケアを充実させる予定である。

**4. 名古屋第二赤十字病院【深部静脈血栓症予防ワーキングチーム】  
多職種連携によるDVT予防対策の取り組み**☆高須 俊太郎(医師)  
○角 由美子(看護師)

【目的・目標】当院では2015年に多職種による深部静脈血栓(以下、DVT)予防チームの活動を開始した。既に周術期患者のDVT予防には弾性ストッキング(以下、ES)と間歇的空気圧迫法(以下、IPC)を併用しており、医療関連機器圧迫損傷(以下、MDRPU)が問題になっていた。予防対策マニュアルを作成し有害事象を増やさずにMDRPUを減らす目的で活動した。

【方法】まず、皮膚・排泄ケア認定看護師が看護師に対してMDRPU予防に関する教育をおこなったが、MDRPU件数は減少しなかった。そこで、診療ガイドライン等を参考にマニュアルを作成し、2018年6月からDVT予防の目的でESの着用を禁止してIPCのみ使用することにした。

【結果】2017年と2018年とでMDRPU発生件数は、39件から9件に減少した。同じく入院後の肺塞栓症発生件数は3件から0件と増加しなかった。

【考察】弾性ストッキングは常に下腿を圧迫し続けること、まれに数日に渡って履いたままになる可能性があることなどが、褥瘡発生につながりやすい要因であると考えられた。マニュアルの変更によってより安全性の高いDVT予防対策になったといえる。各々の専門性を活かした多職種連携によって得られた結果だと考えられる。現在は非周術期患者にも運用を拡大しており、引き続き有害事象のモニタリングを継続する予定である。